

「絵入り総合芸術誌『ザ・ステューディオ (The Studio ,
Vols. 1 - 76, London 1893 - 1919)』の調査研究および記載
記事・図版のデータベースの構築」

研究年度・期間：平成 5 年度

研究代表者：藪 亨

(教養課程 教授)

研究ディレクター：藪 亨

(教養課程 教授)

共同研究者：高橋 亨 田中 敏雄 福本 繁樹 山形 政昭 笹谷 純雄

(美術学科 教授) (教養課程 教授) (工芸学科 助教授) (建築学科 助教授) (文芸学科 講師)

水島ヒロミ 木村 和実

(文芸学科 講師) (大学院 助手)

研究補助者：東野 眞紀 山口 真理

(大学院 副手) (大学院 副手)

研究報告

研究経過の概要

『ステューディオ 純粋美術と応用美術の絵入り雑誌 (The Studio An Illustrated Magazine of Fine & Applied Art)』は、前世紀の 90 年代始めにロンドンにおいて創刊された。創刊当初から当誌は、美術の諸動向を広く包括的に伝え、造形芸術の古典的な諸分野のみならず、これらと同等に装飾美術や工芸あるいは新しいグラフィック・アーツや写真芸術をもちいち早く積極的に扱い、国際的に強い影響力を有した。したがって、世紀転換期の美術・工芸・建築の新しい諸動向とその展開を研究する上では、今日なお最も重要な史料のひとつである。幸い本学図書館には、その創刊から 1919 年にいたるまでの総計 76 巻が所蔵されている。そこで本研究は、本学の工芸史・美術史・建築史の専門研究者たちが定期的に集まり、当史料を総合的に調査研究し、またこれに関連する基本的な図書資料を収集し、さらには当史料についてのデータベースの構築を推進することを目的とした。

そのため、本研究代表者は、『ステューディオ (Vols. 1 - 76, 1893 - 1919)』誌の特別貸し出しを申請し、その許可を受け、本研究期間中これを大学院美学美術史研究室にて保管した。そして共同研究者たちはそこに定期的に集まり、それぞれの専門的な見地から協力して当史料を調査し研究した。また、本調査研究に必要な関連図書資料を収集し購入した。さらに、研究補助者の協力を得て総目次および掲載記事や挿絵・図版などの索引の作成を進めた。さらにまた、幾人かの本学大学院生を作業補助者として、『ステューディオ』誌の主要な挿絵・図版の写真撮影を行い、スライド資料を作成した。そして、フォト CD 資料の作成に向けて、これらスライド資料を、絵画、彫刻、グラフィック、工芸、建築、写真そして日本趣味などのいくつかのテーマに分けて系統的に整理する作業を進めた。

研究成果について

19世紀末にアール・ヌーヴォーの台頭と共に刊行された多彩な絵入り総合芸術雑誌は、オリジナルなグラフィック作品を擁する文芸雑誌群と、写真図版を活用しながら美術の諸問題を広く論じた美術批評雑誌群とに分けることができる。『ステューディオ』誌は、この後者の代表格であった。また前者の代表格のひとつに『イエロー・ブック』（1894 - 7）誌があるが、幸いにもこれが入手出来たので、両者の比較研究を推進した。

また、『ステューディオ』誌上では、様々な筆者が、豊富な写真資料を駆使して、日本の美的文化、すなわち浮世絵、工芸、生け花や庭園などについて、数多くの論評を寄せている。従って、当誌に掲載された関連記事を調査することで、当時の西欧での「日本趣味」の研究を今後さらに推進して行く上での貴重な手掛かりを得た。さらにまた、アフリカや南太平洋の工芸に関する論評や報告も当誌は掲載しており、民族学的にも注目すべき研究資料が見いだされた。そのみならず『ステューディオ』誌上のいくつかの記事には、美術としての写真とその理論についての当時の実情が如実に示されており、当方面の研究資料を充実することができた。

そしてまた、『ステューディオ』誌は、近代工芸運動の発達と強い結び付きがあり、ウィリアム・モリスを会長とする『アーツ・アンド・クラフツ展覧会』を積極的に支援した。幾人かの論者が、この展覧会への多彩な出品物に関して、これらの写真を添えて幾度も報告しており、イギリスの近代工芸についての最新情報が世界に向けて発信されることになったのである。こうした論評や報告を調査研究することで、当代の装飾芸術の実相と工芸理論についての研究を今後さらに推進して行く上での有効な手掛かりを得ることが出来た。

かくして、『ステューディオ』誌に関するデータ・ベースの構築を推進し、今後ヴィクトリア朝時代の芸術文化のパラダイムを総合的に解明して行くに向けての研究基盤を固めた。

研究の反省

アール・ヌーヴォーの出現を逸早く誘った『ステューディオ』誌は、90年代初めにおける純粋美術と応用美術との緊張関係の高まりを背にして創刊されており、その後、種種の曲折を経て今日にまで至っている。従って、当誌出現の意義や特殊性について、共同研究者が共通の理解を得た上で、さらに各個のテーマに則して調査研究を開始するまでには、当初予定した以上の討論の時間を要した。しかも、今回の調査対象となった史料には、創刊されたヴィクトリア朝末期のものだけでなく、これに続くエドワード7世時代を経て、さらには第1次世界大戦終了時までのものが含まれていた。しかし、本史料の調査研究が進むにつれて、ヴィクトリア朝時代の芸術文化や、世紀転換期の美術やデザインに関する貴重で豊富な情報源としての、本史料の価値に圧倒されて行った。そして、今回は準備期間が限られていたこともあって、短縮された当年度の研究期間においては、ヴィクトリア朝時代以外をも含んでいた当初の計画のすべてを十分に実行することが至難であることを痛感させられた。当年度において不十分であったところは、今後における調査研究の機会を期したい。